

反骨の精神史を今に伝える山間の道
釜坂峠

剣の道、呪の道

姫路を起点とし、中国山地を経て鳥取の因幡国府までを結ぶ因幡街道。かつては京から山陽、山陰へ続く数少ない道として、因幡国司の赴任、隠岐への配流、大名の参勤交代等、さまざまな歴史模様が繰り広げられました。街道沿いには大原や平福といった宿場町も発達し往時の佇まいを今に伝えています。今回紹介する「釜坂峠」はこのふたつの町の間位置する小さな峠。時ならぬ宮本武蔵ブームに沸く田舎町を訪ねてみると意外にもこの道が「剣の道」であると同時に「呪の道」でもあったことに気がされます。緑の濃い風景を歩きながら謎に満ちたエピソードを訪ねてみましょう。



剣豪・武蔵のイメージを求めて 全国からファンが訪れる宿場町

釜坂峠の西、岡山県大原町。近年この町は「宮本武蔵生誕の地」であり、少年時代父無二歳に厳しい教育を受けた町として注目を浴びています。武蔵の出生地そのものについては諸説がありますが、明治44年、熊本の武蔵顕彰会がこの地を武蔵生誕の地と確認したことに加え、作家の吉川英治が小説「宮本武蔵」の中で、武蔵を美作生まれ（大原町宮本地区）と書いたことから、一般に広く信じられるようになりました。出生をめぐる論争は他に委ねるとしても、少年期の武蔵がこの地に居住したことは、様々な伝承が物語る通り。武蔵の足跡を尋ねて宮本地区をそぞろ歩く人の姿は絶えることがありません。



武蔵神社奉納絵馬

故郷と異郷の分水嶺 “釜坂峠”を越えて「剣の道」へ

宮本地区を東へ抜けた因幡街道は、ほどなく釜坂峠に通じる上り道となります。坂をしばらく登ると「一貫清水」と書かれたわき水に出会います。十代半ばの武蔵が二度と戻らない決意でこの坂を越えたとき、竹馬の友・森岩彦兵衛はこの場所まで武蔵を見送り、二人はその冷たい水で喉を潤し、別れを惜しんだと言います。武蔵はもっと強い相手と戦いたい、己の剣がどれほど世間に通用するか知りたい、そんな思いでこの峠を越えたことでしょう。

眼下には宮本村……。幼い頃から、何度も往復した峠道。勝手を知った道ながらこれまでの気楽な峠越えとは目的も目指す場所も違います。故郷を捨て、友と別れても、求めずにいられない生き方……。それこそ、生涯をかけて武蔵が追求する「剣の道」そのものだったのです。

現在の釜坂峠は、江戸時代に鳥取藩主池田侯が江戸への参勤交代のため、道幅を広げたものが残っているということで、当時の道は一部山手に名残が見られますが、今より狭く厳しい坂道であったと思われます。



一貫清水：一貫清水とは、錢一貫に値するほど冷たく美味しいことからその名がついたという湧き水。



鎌倉神社(さのもじんじや)：神主の打つ太鼓とバチの動きにヒントを得て二刀流(二天一流)を編み出すきっかけになったと伝えられる。

武蔵初決闘の地「平福」

街道沿いに峠を下ると、そこは播磨の国・平福（現兵庫県佐用町平福）です。平福は因幡街道の宿場町で、街道沿いの連子窓、千本格子の家並み、佐用川の川石垣に連なる白壁の川屋敷、映画「鎧の権三」のロケにも使用された土蔵群による川端風景に昔ながらの景観が見られます。本陣跡の街道沿いの水路は、



平福の川端風景

佐用川の清らかな水を利用した当時の上水道跡で、魚が泳ぐ姿が今も見られ、本陣跡の裏手には下水道跡が残っており当時の繁栄が偲べれます。

平福の東側の山頂には、利神(りかん)城があります。利神城は赤松一族の別所敦範が1349年に築いた城で、武蔵の母(義母説もあり)は当時の城主別所林治の娘と言われています。築城の際、山には石積に使う堅い岩石がないため、平福の西の山から岩石を切り出し、平福の町で加工して利神城まで運んだそうです。見るからに急峻な山道を、重い岩石を運びながら苦勞をして登った先人の姿が目浮かぶようです。

武蔵の母は、無二歳と別れた後、平福の大庄屋役田住政久の後妻として嫁ぎます。少年時代の武蔵は、無二歳の死後、母を慕ってよくこの地を訪ねたと言われます。また、ここは、13歳の武蔵が初めての決闘に臨んだ土地でもあります。場所は佐用川にかかる金倉橋のもと、相手は新当流の使い手有馬喜兵衛。決闘は大方の予想を裏切って、わずか13歳の武蔵の勝



武蔵初決闘の場に立つ六地藏



利神(りかん)城跡

利に終わりました。思えばこの決闘で武蔵が見せた残酷なまでの勝負への執念が、彼を故郷に居辛くさせる結果を招いたのでした。この街を通り過ぎる武蔵の胸に去来したのは、一体どんな想いだったのでしょうか。

道満VS晴明 佐用町に残る陰陽師伝説

取材中に、意外な人物の伝説に出会いました。平福の西、大木谷と呼ばれた山間(現佐用町大木谷)で、なんと、平安時代の高名な陰陽師・安倍晴明と彼の永遠のライバル蘆屋道満が激しい死闘を繰り広げたと云うのです。陰陽師とは、簡単に言うと占い師、幻術師のようなもの。星の相、人の相、方位を観たり、呪(しゅ)^{※1}によって人を殺すことも可能であったとされます。伝説に登場する安倍晴明と蘆屋道満(またの名を道摩法師)はいずれも実在の人物で、以前にも晴明の父や妻を



蘆屋道満の塚



安倍晴明の塚



晴明堂

ぐる激しい闘いを交わしている間柄。これまでの勝負はどちらも晴明の巻き返して決着がつき、道満はついには京を追放されて、因幡街道を播磨のこの地まで逃れてきました。追放されてもお抵抗を続ける道満を追って播磨に向かった晴明。ついにはここ大木谷が二人の最終決戦の場になったのです。

大木谷の棚田をはさんで北側の山の上(甲大木谷)には安倍晴明の塚が、南側の山の上(乙大木谷)には蘆屋道満の塚があります。晴明の塚や道満の塚は全国に何カ所もありますが、二人の塚が対峙して残っているのは、全国でここだけだそうです。両者の塚の間の谷には、「龍飛橋(やりとびばし)」という橋があり、呪によって槍が飛び交うほど激しい闘いが繰り広げられたため、このような名前が付いたと言われています。また、その近くには晴明に敗れた道満の首を溪流で洗ったとされる「おつけ場」も残っています。

道満の足跡はここ大木谷でぶつ切りと途切れています。道満はやはりこの地で力尽きたのでしょうか。その無念を鎮めるために道満塚が建てられたとのこと。



「安倍晴明像」京都晴明神社所蔵

こうした両者の対決を記念して晴明塚が建てられたということが伝えられています。

反骨の精神史を今に伝える 山間の道「釜坂峠」

宮本武蔵と蘆屋道満。権力に組みすることなく、反骨の精神で時代を生きた二人。二人が辿った因幡街道。武蔵が新たな道を切り開くために越えた峠、そして、道満が越えられなかった峠「釜坂峠」。

私たちは、先人の様々な思いを秘めたこの地を取材しました。少年期の武蔵が母に会いたい一心で、釜坂峠を越え宮本村から平福まで歩いた道は、今では智頭急行で10分の道のりです。武蔵の足跡を辿って今日もたくさんの観光客がこの地を訪れています。

最後に、今回の本取材へのご協力と、貴重な資料を提供していただいた佐用町の藤山晴雄氏、原田昇氏、谷口武雄氏並びに佐用町産業課の皆様へ、心からお礼を申し上げます。

※1) 武蔵の出生地に関しては、岡山県北部の美作(現・英田郡大原町宮本)説と、兵庫県印南郡米田村(現・高砂市米田町米田)説、および播磨国揖保郡宮本村(現・揖保郡太子町宮本)説があります。

※2) 呪(しゅ)とは、人の心やもの(名声・地位・愛情・欲望)または、人の想いや恨みが不思議な現象や怨霊の形となって現れるもの(ものの怪・あやかし)をさし、陰陽師はこれをも自由に操って、自然現象や人間に起きた異常を解決する力を持つといわれています。